

科目名 哲学
Title Philosophy
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 魚谷 雅広(ウオタニ マサヒロ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

「人間とは何か」という、漠然と分かっているように感じつつ、答えが出ない問いを改めて考える。この講義では、「自分」という存在を「他者」や「社会」との関係から問い、そして、現代社会における議論も踏まながら、私たちの在りようを考えていく。

達成目標

- ・各テーマについての、基礎的な知識と視点を理解できる。
- ・テーマに対して考察し、根拠を提示したうえで自分なりの考えを表現できる。
- ・哲学・思想(殊に西洋)と現代の問題をリンクさせつつ、自分や世界の在りようをチェックできる。

スケジュール

第1回	ガイダンス	-人間とは何か-
第2回	ギリシャ哲学(1)	「よく生きる」とは (ソクラテス)
第3回	ギリシャ哲学(2)	「イデア」と国家・共同体 (プラトン)
第4回	ギリシャ哲学(3)	「エウダイモニア(幸福)」と国家・共同体 (アリストテレス)
第5回	近代の哲学(1)	方法的懐疑 -われ思う、ゆえにわれ在り- (デカルト1)
第6回	近代の哲学(2)	二元論と心身問題 (デカルト2)
第7回	近代の哲学(3)	「社会契約」と所有権 (ロックなど)
第8回	前半をふりかえって	
第9回	近代の哲学(4)	認識論 -われわれは何を知ることができるか- (カント1)
第10回	近代の哲学(5)	道徳と平和 -われわれは何をなすべきか- (カント2)
第11回	近代の哲学(6)	「ニヒリズム」の時代に生きる「超人」 (ニーチェ)
第12回	現代社会と思想(1)	人間の「存在」について考える (ハイデガー)
第13回	現代社会と思想(2)	「完全なる思考の欠如」と「悪の凡庸さ」について (アレント)
第14回	現代社会と思想(3)	「正義」について (ロールズなど)
第15回	これまでをふりかえって	

教科書・参考文献

教科書 指定しない。適宜プリントを配布する。

参考書 岩田靖夫『ヨーロッパ思想入門』(岩波ジュニア新書、2003年)、河上正秀・小林秀樹編『変容する社会と人間』(北樹出版、2014年)。そのほか、授業内で適宜紹介する。

授業外での学習

配布資料を読み直し、不明な点は調べるなどして補足・整理しておくこと。

評価方法

期末試験(60%)と、小レポートまたは課題(25%)、コメントシート(15%)で評価する。

履修上の注意

私たちの生活や国内外の諸問題についてアンテナを張ること、社会規範を身につけること、そして、積極的に学んで考えること。

科目名 倫理学
Title Ethics
科目区分 一般教養 (人文)

担当教員
教授 福岡 聡 (フクマ サトシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

「存在についての判断 (~である) から規範についての判断 (~すべし) を導くことは可能であるのか」といったメタ倫理学にまつわる諸問題から、「帰結主義、義務論、徳倫理学、契約主義、どの立場に基づく道徳的判断が正しいのか」「動物に権利はあるのか」「正しい戦争はあるのか」といった規範・応用倫理学、そして政治哲学にまつわる問題群を本講義では考察する。こうした問題を検討するにあたって、私たちの常識に依拠しつつも、その常識がよって立つ根拠とは何であるのかを参加者と共に問い直すことが本講義の目的である。

達成目標

上記の問題群を検討することを通じて、倫理的な問題に対する自分なりの考えを持ち、他人に自分の考えを適切に説明することができるようになる。

スケジュール

第1回	倫理学とは何か・導入
第2回	「である」から「べき」を導けるのか
第3回	メタ倫理学・1 道徳判断は情緒的に行われているのか
第4回	メタ倫理学・2 善が善である理由は何なのか (小テスト)
第5回	規範倫理学・1 正しい道徳的判断とは何か① (帰結主義・義務論)
第6回	規範倫理学・2 正しい道徳的判断とは何か② (徳倫理学・契約主義)
第7回	規範倫理学・3 嘘をつくことは許されるのか
第8回	規範倫理学・4 道徳的な運によって我々の道徳判断は左右されるべきか (小テスト)
第9回	応用倫理学・1 刑罰は本当に必要なのか
第10回	応用倫理学・2 脳が交換されたら、私は私なのか
第11回	応用倫理学・3 動物に権利はあるか (小テスト)
第12回	政治哲学・1 他人に寛容になることができるか
第13回	政治哲学・2 先進国は移民を受け入れるべきか
第14回	政治哲学・3 正しい戦争はあるのか (小テスト)
第15回	まとめ

教科書・参考文献

教科書 ベン・デュプレ 『人生に必要な哲学50』 (近代科学社 2009)

参考書 野家啓一・門脇俊介 (編) 『現代哲学キーワード』 (有斐閣 2016)
大庭健 (編集代表) 『現代倫理学事典』 (弘文堂 2006)

授業外での学習

次回の授業範囲に関連する項目について、指定した教科書・参考書をよく読み、予習しておくこと。また、授業後は必ずノートや配付資料に目を通し、学習内容の定着を図ること。

評価方法

期末試験の成績で評価する (100%)。

履修上の注意

基本的に、講義形式の授業だが、クラス・ディスカッションなど学生が発言をする機会をできる限り提供していきたい。授業中の私語や携帯電話、スマートフォン等の使用は絶対に禁止。

科目名 心理学
Title Psychology
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 小池 庸生(コイケ ノブオ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 前期
-----------	------------	----------	------------

目的

人間の行動は、外界・内界からの情報を受けて変化します。つまり、情報を受け取り、認識し、その対応として行動が生じるわけです。では、どのようにして情報を受け取り、認識しているのでしょうか。もっとも基本的な機能と働きについて理解することを目的として、具体的な事例から、人間の機能と働きについて学び、心理学の知識を深めることも目的として講義を行います。

達成目標

具体的な事例から、基本的な人間の機能と働きを学ぶことで、実生活に活用できるようになることが、受講生の到達目標となる。

スケジュール

第1回 オリエンテーション 講義概要、スケジュール、評価方法等
第2回 I. 脳と心理学
第3回 I. 脳と心理学
第4回 I. 脳と心理学
第5回 II. 感覚と知覚
第6回 II. 感覚と知覚
第7回 II. 感覚と知覚 III. 学習
第8回 III. 学習
第9回 III. 学習 IV. 記憶と思考
第10回 IV. 記憶と思考
第11回 IV. 記憶と思考 V. 動機づけと感情
第12回 V. 動機づけと感情
第13回 V. 動機づけと感情
第14回 VI. パーソナリティ
第15回 VI. パーソナリティ

教科書・参考文献

教科書 使用しません。

参考書 講義中に適宜指示します。

授業外での学習

心理学の基礎に関する本を読んでおくこと。
心理学の内容がより理解できるようになるので自分だけでなく他人の行動などについてよく観察してみる。

評価方法

定期試験が80%、講義内課題等授業に取り組む態度が20%

履修上の注意

そのときどきの状況や必要性に応じて、授業計画を変更して行うことがある。

科目名 民俗学
Title Folklore
科目区分 一般教養(人文)

准教授 鈴木 耕太郎(スズキ コウタロウ)
担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

現在の中に過去があり、過去の中から現在が見える—20世紀に入り、野の学問として成立した「民俗学」が果たした大きな役割は、ある時間軸(過去あるいは現在)の中から、それとは別の時間軸の事象や課題を浮かび上がらせたことだろう。さらにいえば、民俗学的な視座からは、過去と現在だけでなく未来をも見出すことができるのではないが、本講義では、民俗学の基礎を学んだ後に、あえて論点を絞らず、多様な観点・論点から民俗学および近隣領域の学問を学ぶ。そのため、やや「広く浅く」となってしまうこと、ご了承願いたい。適宜、映像資料などを用いながら民俗学の可能性、あるいは問題点や限界にまで言及することで、民俗学を通して過去だけでなく、現在そして未来を問うていくことを最大の目的とする。

達成目標

- (1) 民俗学の基礎を学んだ上で、この学問が果たすべき役割とは何かを、自分に引きつけて考察できるようになること。
- (2) 多様な民俗事象を学び、自分自身がいかに関わる世界で生きているかを言語化できるようになること。
- (3) 民俗学を通して、過去や現在のみならず未来をも語り、あるいは思い描けるようになること。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション(受講上の注意/評価方法等の確認など)+民俗学の基本I—民俗学とは何か
- 第2回 民俗学の基本II—柳田國男の民俗学とその目的(1)
- 第3回 民俗学の基本III—柳田國男の民俗学とその目的(2)
- 第4回 民俗学の現在—現代民俗学の意義と限界
- 第5回 ヒトと自然と民俗—環境民俗学と南方熊楠
- 第6回 民俗から社会を見つめる—不知火海総合調査団と作家・石牟礼道子
- 第7回 調査されるという「迷惑」—宮本常一のフィールドワークとその功罪
- 第8回 現象としての「妖怪」/表象としての「妖怪」—妖怪そもそも論
- 第9回 キャラ化する「妖怪」—なぜ妖怪は愛される存在になったのか
- 第10回 生き続ける「伝説」—都市伝説・学校の怪談はなぜ生まれるのか
- 第11回 宗教民俗学という視点—日本は本当に無宗教国家なのか
- 第12回 宗教テキスト研究の可能性—牛頭天王縁起を例にして
- 第13回 マレヒト論とその展開—折口信夫の神霊観
- 第14回 ジェンダー/セクシュアリティにまつわる民俗学
- 第15回 身の周りの民俗学—民俗学の可能性にせまる/総括的展望

教科書・参考文献

教科書 レジユメを配布するため、特に使用しない。ただし、下記の参考書は余裕があれば各自、一読しておくこと。

- 参考書 1、福田アジオ『日本民俗学の開拓者たち』(山川出版社、2009年)
2、八木透編『新・民俗学を学ぶ』(昭和堂、2013年) など。

授業外での学習

第13回目までに小レポートを提出してもらう。身の周りにどのような民俗事象があり、それが自分とどう関わっているかを早くから調べておくこと(第15回目の講義では数名に小レポート内容を発表してもらう。評価にもつながるので、立候補をお願いしたい)。予習・復習希望者は参考文献を教えるので、鈴木まで連絡すること。

評価方法

目安は期末考査(記述型中心)70%、小レポート10%、リアクションペーパー/授業態度20%。最終的に総合して成績評価を算出。なお、小レポートは必ず提出のこと(未提出者は大幅減点)。また、リアクションペーパーの提出率が低い、または毎回その内容が薄い場合などは、出席しても評価にはつながらないので注意すること。

履修上の注意

可能な限り「地域文化論」も受講することをお勧めする(強制はしない)。講義後にはリアクションペーパーを提出してもらう(3~5回)。その内容も評価に含まれるので真剣に書くこと。もちろん、講義中の態度も評価対象なので、受講生各自のメリハリのきいた姿勢に期待する。ぜひ、積極的に講義に参加する姿勢を見せてもらいたい。また、なるべく前の座席から詰めて座るようにご協力いただきたい。

科目名 宗教学
Title Religion
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
教授 小牧 幸代(コマキ サチヨ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

他者の宗教も、自分の宗教も、同じように「宗教」だと認めることができるようになるまで、宗教という言葉は固有名詞に近かった。ヒンドゥー教でもイスラーム教でも、宗教を意味する単語とは、すなわち自分の宗教を指していた。「宗教学」は、キリスト教徒の研究者が、キリスト教以外の宗教を研究するための学問として、19世紀後半に成立した。アジア・アフリカなどの植民地経営に際し、現地の「未開宗教」を理解する必要に迫られたのである。やがて、宗教学はキリスト教と他の宗教を比較検討し、宗教の諸要素を探求したり、宗教の起源や発展過程を議論したりする学問となった。宗教の比較研究は、比較神話学や比較言語学、さらには「宗教の進化論」にも応用され、帝国主義や人種差別の正当化につながっていく。本講義では、世界・日本の近現代史も絡めつつ、宗教学の歴史的展開と世界三大宗教の具体相を、多数の画像と現物を駆使して紹介する。

達成目標

新聞やテレビで伝えられる「宗教報道」は、欧米中心の宗教観を反映しているものが多い。また、日本人にとっての「宗教」が、「個人の精神的・内面的なもの」とされがちな背景にも、「西欧近代キリスト教」的な思想が根底に横たわっている。この講義の達成目標は、特定の宗教および宗教一般に関する「知識」を深め、「宗教情報」についてのメディアリテラシーを高めることにある。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス～「宗教」とは何か。日本人と宗教、「聖なるもの」の両義性
- 第2回 宗教への視座①～民族宗教と創唱宗教、無宗教の宗教感覚、宗教の定義と理論
- 第3回 宗教への視座②～古代宗教と神話の世界観：古事記、旧約聖書、インド神話。比較神話学
- 第4回 植民地主義と宗教調査～古代インド・ヴェーダ文献群の解読と衝撃。調査研究の対象としての宗教
- 第5回 宗教対立とその背景①～映画「ボンベイ」前半部分の視聴と解説
- 第6回 宗教対立とその背景②～映画「ボンベイ」後半部分の視聴と解説
- 第7回 キリスト教の歴史と文化①～イエスの生涯、キリスト教の誕生、12使徒、福音書の編纂
- 第8回 キリスト教の歴史と文化②～東西分裂、修道院、十字軍と聖遺物、宗教改革、植民地における展開
- 第9回 イスラームの歴史と文化①～ムハンマドの生涯、クルアーンの編纂、六信五行
- 第10回 イスラームの歴史と文化②～シーア派の登場、神秘主義と聖者信仰、植民地主義への抵抗、「原理主義」思想
- 第11回 仏教の歴史と文化①～ブツダの生涯、仏典の編纂、十大弟子、上座仏教と大乘仏教
- 第12回 仏教の歴史と文化②～仏足石と仏舎利、仏像制作の歴史、仏教美術
- 第13回 暦と年中行事～世界観が分かる時間の区分け方と時間への名付け
- 第14回 通過儀礼の構造分析～人間観と死生観が分かる冠婚葬祭の考察
- 第15回 まとめ～宗教と政治の関係。聖地をめぐる紛争、政教分離と世界の宗教教育

教科書・参考文献

教科書 毎回、資料を配付する。

参考書 授業時に指示する。

授業外での学習

毎回配布する資料を授業後にも読むなどして知識の定着を図るとともに、その知識を活用し、常に身近な出来事や現象に関心をもつよう心がけること。そのなかで生まれた疑問は、授業中や授業の前後に、遠慮なく教員にぶつけてみてください。

評価方法

レポート(30%)～3回実施。1回10点満点。内容に応じて10段階評価する。 定期試験(70%)～試験範囲は配布資料。

履修上の注意

授業には、1回目から出席すること。

科目名 考古学
Title Archaeology
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 池田 悦夫(イケダ エツオ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 前期
-----------	------------	----------	------------

目的

考古学とは、遺跡・遺構・遺物を研究対象として、層位学的方法や型式学的方法など考古学的独特の方法を用いて、人間の歴史をめぐるいくつかの課題を解明しようと試みる学問です。講義では、考古学の枠組みや過去をどのように見るか等考古学の理論についての理解を深め、調査方法、分析方法、研究方法など考古学の方法に触れ、また、具体的な実践例に接し、考古学の理解を深めることを目的とします。なお、講義の進行状況により講義の内容を一部変更する場合があります。

達成目標

出土資料を正確に読むということを大切に、その能力を身に付けることを目的とします。さらに、読み取った遺構・遺物の情報から、問題点を引き出して、その課題を解決する能力を身に付けることを目的とします。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション (講義概要、評価方法、受講予備アンケート)
- 第2回 考古学の特性と学史 (考古学とはどのような学問か)、(考古学はどのような歩みを辿り現在に至ったのか)
- 第3回 考古学を学ぶ意義 (考古学を学んで何の役に立つのか)
- 第4回 遺跡踏査・発掘調査 (なぜ、そこに遺跡があると分かるのか)、(発掘調査はどのような手順で行われるのか)
- 第5回 整理調査 (整理調査はどのような手順で行われるのか)
- 第6回 整理調査の実践 (遺物を観察する方法にはどのような方法があるのか)
- 第7回 陶磁器の分類 (陶磁器はどのような枠組みを有するのか)
- 第8回 型式学的方法と層位学的方法 (遺物のどこを見れば年代は分かるのか、なぜその年代といえるのか)
- 第9回 考古学的歴史叙述の方法① (考古学で何が分かるのか)
- 第10回 考古学的歴史叙述の方法② (考古学はどのような歴史像を描けるのか)
- 第11回 考古学的歴史叙述の方法③ (弥生時代という概念はどのように成立してきたのか)
- 第12回 学際的研究の方法① (自然科学と考古学から何が分かるのか)
- 第13回 学際的研究の方法② (文献史学と考古学から何が分かるのか)
- 第14回 研究成果の記述 (調査研究成果はどのような形で残されるのか)
- 第15回 総括授業 (質疑応答 試験について)

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。必要に応じてプリント配布

参考書 プリント配布に記載、または、その都度、指示します。

授業外での学習

遺跡見学会や考古学資料館・博物館などの見学の機会をできるだけ持つこと。また、授業後は、ノートや配布資料に目を通し、学習内容の定着を図ること。

評価方法

平常点(45%)、期末試験(55%)

履修上の注意

平常点は、質問に対する応答の仕方や参加態度など授業に臨む姿勢(15%)、毎回のショートコメントとその内容(30%)です。

私語・遅刻・授業中のスマートフォンの使用は厳しく対処します。出席は厳密にとり毎回授業に関するショートコメントを求め、これをもって出席のカウントとします(授業欠席届を提出できる事由に該当する場合は除く)

科目名 日本史 (古代～近世)
Title Japanese History I
科目区分 一般教養 (人文)

担当教員
非常勤講師 綱川 歩美 (ツナカワ アユミ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 前期
-----------	------------	----------	------------

目的

- ・歴史史料の種類を理解し、各種辞書類の使い方を習得し、その内容を読み解く手法を学びます。また、史料から得られた根拠や先行研究を踏まえて理論的な考察を加えたレポート作成への能力を養うこととします。
- ・日本の歴史 (古代～近世) を、国家や社会の変遷をたどるとともに、それらの時代に生きた人々の文化や思想にも注視します。
- ・歴史を出来事の単なる暗記と捉えるのではなく、歴史的出来事が政治や文化にもたらした意味を考えることで、私たちが生きる現代社会を洞察する視角と知識を養います。

達成目標

- ・歴史研究のあり方を知り、歴史を学ぶことの意義を理解する。
- ・日本の「伝統」「固有の文化」とされるものが、広く東アジアやヨーロッパ世界の影響を受けて形成されてきたことを理解する。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス・歴史学への招待－歴史を学ぶ意義・歴史学の歴史 (史学史)
- 第2回 東アジア世界の中の倭国
- 第3回 律令国家と奈良時代
- 第4回 平安王朝の成立
- 第5回 古代国家と仏教
- 第6回 院政期から鎌倉時代
- 第7回 中世国家・社会と宗教
- 第8回 南北朝から応仁の乱へ
- 第9回 近世国家の成立
- 第10回 近世社会の成熟① - 書物・出版の時代
- 第11回 近世社会の成熟② - サムライの近世
- 第12回 近世の食生活
- 第13回 近世の衣類文化
- 第14回 自然との対峙・共存
- 第15回 都市の発展と高崎の近世・近代

教科書・参考文献

教科書 特になし。毎回レジユメを配ります。

参考書 『大学の日本史』1 (古代)、2 (中世)、3 (近世)、山川出版社、2016年。
荻部直、片岡龍編 『日本思想史ハンドブック』新書館、2008年。その他、必用に応じて授業中に指示

授業外での学習

授業内で興味を持ったことについて、自身で深く調べる努力をしてください。博物館や美術館、地域の歴史イベントへのアンテナを張って、観覧したり参加してみるようにしましょう。

評価方法

毎回授業内容の確認小テストと期末レポートにより総合的に判断します。レポート課題の詳細は授業中に指示しますが、関連文献を1冊読んでレポートして貰う予定です。
また、評価配分は、平常点50%、レポート50%とします。

履修上の注意

大学での歴史学は受験用の暗記科目ではありません。歴史が過去の出来事の総体であるならば、その歴史素材を通じて、調べたり考えたりする方法を学ぶ学問です。こうした学びの方法は単位を取るための机上の学問だけでなく、社会生活の上で様々な応用できることでもあるので、積極的な態度で授業に臨むことを求めます。

科目名 日本史 (近現代)
Title Japanese History II
科目区分 一般教養 (人文)

担当教員
非常勤講師 川上 真理 (カワカミ マリ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

この授業では、19世紀後半から20世紀の日本の国家と社会の歩みを、トピックごとに解説する。それを通じて、歴史的視野で現在を捉える姿勢を身につける。

達成目標

近代国家成立過程の政治的・社会的過程を説明できる。
戦争の時代に日本の指導者と民衆が経験した事柄を説明できる。
戦後日本の歩みを説明できる。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス：講義計画と評価について / はじめに：前近代の日本
- 第2回 太平洋世界からみた幕末日本
- 第3回 戊辰戦争と廃藩置県
- 第4回 殖産興業政策の展開
- 第5回 地方自治制と民権運動
- 第6回 内国植民地の過程
- 第7回 日清・日露戦争と世界秩序
- 第8回 大正デモクラシーと第一次世界大戦
- 第9回 大衆社会の芽生え
- 第10回 満州事変と日中戦争
- 第11回 アジア・太平洋戦争
- 第12回 農村の変容
- 第13回 高度経済成長の時代
- 第14回 新自由主義の台頭
- 第15回 まとめ

教科書・参考文献

教科書 教科書は指定せず、講義計画に基づいたレジュメを配布する。

参考書 木村茂光ほか編『大学でまなぶ日本の歴史』吉川弘文館 (2016年)、佐藤信ほか編『詳説日本史研究』山川出版社 (2017年) など。

授業外での学習

講義で示す参考文献を読んで予備知識を得、受講後はそれを読み直して理解を深める。

評価方法

リアクションペーパー (40%) と期末試験 (60%) で評価する。

履修上の注意

著しい遅刻は欠席と見なす。

科目名 西洋史
Title European and American History
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 宮川 剛 (ミヤガワ ツヨシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 前期
-----------	------------	----------	------------

目的

本講義は、中世から近代のヨーロッパの社会や歴史に様々な角度から光をあてて、世界史におけるヨーロッパの役割、他の地域・文明に与えた影響などをさぐる。現代世界形成に大きな役割を果たしたヨーロッパの歴史的背景について理解を深めることで、グローバル化の進んだ現代にふさわしい教養・認識を身につけることを目指す。

達成目標

中世から近代のヨーロッパの政治、経済、宗教など、毎回設定したテーマについての講義を通じて基本的な知識を身につけるとともに、講義の内容に関係する資料を読み込むことで、現代世界の諸問題の歴史的背景を理解する。

スケジュール

- 第1回 イントロダクション：西洋史概説
- 第2回 西洋中世社会
- 第3回 宗教改革
- 第4回 宗教改革の社会的影響
- 第5回 主権国家体制の確立
- 第6回 絶対王政の実態
- 第7回 17世紀の危機
- 第8回 複合国家
- 第9回 17世紀イギリスの政治動乱
- 第10回 18世紀英仏の覇権争い
- 第11回 アメリカの独立
- 第12回 イギリスの産業革命
- 第13回 フランス革命
- 第14回 フランス革命の社会史
- 第15回 自由主義とナショナリズム

教科書・参考文献

教科書 特になし

参考書 授業中に指示する。

授業外での学習

前回の授業中に指示した事柄について、事前に参考図書などで調べておくこと。
授業後はノートや配布資料に目を通し、学習内容の定着を図ること。

評価方法

定期試験：80%、小レポート：20%。

履修上の注意

高等学校の「世界史」の知識を前提として講義します。

科目名 東洋史
Title Asian History
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 竹内 洋介(タケウチ ヨウスケ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 前期
-----------	------------	----------	------------

目的

現代社会において中国の存在が比重を高める中、どのようにして現代中国が形成されたのか知ることは重要である。本講義では、中国史とりわけ王道たる政治史を中心に据え、周縁世界の社会状況などについても取り扱う。時代的には、中華王朝の始まりとされる夏・殷・周の三代から帝政が終焉を迎える清朝末期までを概説する。多元的に存在した諸文化が中華に取り込まれ、中華世界が拡大と再生を繰り返し、夷狄である清朝の元で「華」と「夷」の統合が果たされていく過程を見ていくことで、現代中国形成の前提となる帝政中国がどのように構築され現代に続いているのか、その意味を考えていく。

達成目標

- 1、中国の多様な文化や歴史の連続性を広い視野から考察することによって、歴史的な思考能力を養う。
- 2、歴史的な事象がなぜ勃発し、それがどのような結果をもたらしたのか、様々な資料や統計と向き合い自ら思考・分析することができる。
- 3、高等学校地理・歴史の教員として生徒を指導するに必要な中国を中心とする東洋史の知識を獲得する。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス：「東洋史」の概観～東洋史と中国史～
- 第2回 中華文明の誕生～王朝の成立～
- 第3回 中華の拡大と統合～春秋・戦国時代～
- 第4回 「帝国」の誕生と多元的世界の統一
- 第5回 混迷する政局と分裂への序曲～後漢・三国時代～
- 第6回 中華世界の分裂と再統合～五胡十六国・南北朝時代～
- 第7回 隋唐世界帝国の成立
- 第8回 律令体制から藩鎮体制へ～安史の乱と唐王朝の変容～
- 第9回 武断政治から文治政治へ～北宋の成立～
- 第10回 北宋をとりまく政治状況～周縁からの挑戦～
- 第11回 夷狄による中華支配～モンゴル・元朝～
- 第12回 中華の復興と「北京定都」への道～明王朝の統治～
- 第13回 明末清初期の「中国」
- 第14回 「華夷一家」と清朝の統治～「中国」の完成～
- 第15回 清朝の変容と帝制の終焉

教科書・参考文献

教科書 使用しません。適宜レジュメおよび資料を配付します。

参考書 各回の講義において、各回に関わる参考文献を紹介しますが、全体的な参考書として下記を挙げておきます。

授業外での学習

参考書や講義中に示す書籍など、各回に関連する部分の概説書を読み、各時代の時代背景を確認して講義に臨んでほしい。また、講義内容を整理し、問題点・疑問点などをまとめ、適宜解決できるようにすること。

評価方法

高崎経済大学の成績評価基準に基づき、数回のリアクションペーパー提出(20%)と学期末の定期試験(80%)の成績を総合して評価する。なお、毎回の出席確認を行い、特段の理由が無く3分の1を超えて欠席した場合には、成績評価は行いません。

履修上の注意

とくにありませんが、他の授業と同様に、授業中の私語やスマートフォンの使用などは止めてください。歴史学に興味のある方の受講を歓迎します。

科目名 言語学
Title Linguistics
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 河内 健志(カワウチ ケンジ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 前期
-----------	------------	----------	------------

目的

私たちが日常使用している言語は、あまりにも身近すぎる存在であるため、ほとんど意識されることはない。実際、どうやって音が作られているのか、どのようにことばを組み立てているのが意識しながら生活する人はいない。言語学は言葉の様々な側面を科学的、客観的に扱う分野です。この授業では、自然言語の基本的な姿(「音」・「語」・「文の仕組み」・「意味」・「言語の伝達」など)を日本語のデータを中心に様々な言語を観察し、多角的に分析する。

達成目標

言語が持つ特徴(「音」・「語」・「文の仕組み」・「意味」・「言語の伝達」など)を捉えるための基礎知識を養う。言語を客観的に観察・分析する力を身につける。

スケジュール

- 第1回 導入：言語学の射程
- 第2回 言語知識
- 第3回 言語の音：音声学・音韻論1
- 第4回 言語の音：音声学・音韻論2
- 第5回 言語が形成される仕組み：形態論1
- 第6回 言語が形成される仕組み：形態論2
- 第7回 文が構成される仕組み：統語論1
- 第8回 文が構成される仕組み：統語論2
- 第9回 意味の捉え方：意味論1
- 第10回 意味の捉え方：意味論2
- 第11回 言語伝達：語用論1
- 第12回 言語伝達：語用論2
- 第13回 言語獲得と喪失
- 第14回 言語の多様性と変化
- 第15回 総括

教科書・参考文献

教科書 毎回資料を配布します。

参考書 角田太作(2009)『世界の言語と日本語』くろしお出版 / 町田健(2001)『言語のしくみ(シリーズ・日本語のしくみを探る3)』研究社

授業外での学習

事前学習：次の授業で扱う配付資料を予習しておくこと。事後学修：授業で扱った内容を資料、ノートなどにより復習し、授業内で紹介した参考図書などを読み理解を深める。

評価方法

レポート 60%、クイズ 40%

履修上の注意

特にありません。

科目名 日本文学
Title Japanese Literature
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
名誉教授 千葉 貢(チバ ミツギ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

文学は精神的な活動の所産である。古今東西を貫く思想や、時世に対峙したり抵抗したりした精神、表現などに溢れている。それを証左するかのようには、『古今和歌集』のなかに「春ごとに花の盛りはありなめど、相見むこことは命なりけり」(詠み人知らず)と歌われ、山本有三は『路傍の石』のなかで、「鉄道にぶらさがるなんてこことは、べつに勇ましいことでも大胆なことでもないんだよ。そんなのは匹夫の勇というもんだ。」と、進学できないと諦め、自暴自棄になっていた主人公・愛川吾一少年を戒め諭している。金子みすゞは「星とたんぼ」と題する短い詩のなかで、「青いお空のそこぶかく / 海の小石のそのように / 夜がくるまで沈んでる / 見えぬけれどもあるんだよ / 見えぬものもあるんだよ」と見ている。 - - だから、文学は風景を眺めたり人を観照したりして自己を啓発させる媒体である。文学作品を通じて「生き抜く力」を養いたい。

達成目標

当講義に於ける達成目標は、目的の項のなかで示した通り、「風景を眺めたり人を観照したりして自己を啓発させる」ことである。「自己を啓発させる」媒体や素材として「文学」があり、数々の作品を紹介したい。スケジュール(講義計画)に掲げた作品だけが「文学」ではないが、掲げた作品を賞している人間性や思想、精神の理解を促すと共に、「近代化」との関わりについて比較し、考察させたい。

スケジュール

- 第1回 『万葉集』と自然、言霊信仰(animism) - - 「うたう」「眺める」ということ
- 第2回 『万葉集』と可憐(あたら)の精神 - - 親心、女心、防人(さきもり)の心など
- 第3回 『古今和歌集』と自然 - - 花鳥風月や「あはれ」をうたう、栄枯盛衰、有為転変をうたう
- 第4回 『古今和歌集』と無常観 - - 栄枯盛衰、有為転変の必然をうたう
- 第5回 『平家物語』と恋愛(横笛と瀧口入道) - - 身分階級、対象喪失
- 第6回 『奥の細道』の思想(輪廻転生、擬死再生) - - 人生は先師の追悼の旅である
- 第7回 二葉亭四迷『浮雲』と近代化 - - 「近代化」に翻弄された「内海文三」のやるせなさ
- 第8回 北村透谷『漫罵』(まんば)と近代化 - - 皮相な「近代化」の矛盾を批判、陥穽を予告
- 第9回 夏目漱石『吾輩は猫である』の魅力や思想 - - ヒロイック(heroic)な精神
- 第10回 石川啄木(短歌や評論)と故郷喪失の文学(patriotism) - - 田舎者の愛憎物語
- 第11回 島崎藤村『破戒』と近代的な自我の確立 - - 歴史や社会に抑圧された人々
- 第12回 田山花袋『田舎教師』とナショナリズム - - 青雲の志と悲しみの告発
- 第13回 葉山嘉樹『セメント樽のなかの手紙』とプロレタリア文学 - - 制度に強いられた人々
- 第14回 梶井基次郎『冬の蠅』と私小説 - - 滅び行くものへの自己投影、そして独り言
- 第15回 宮澤賢治(詩や『虞十公園林』)の魅力や思想 - - 誰が本当の「たりない人」か

教科書・参考文献

教科書 指定しません。

参考書 『日本文学史』小西甚一 講談社学術文庫 1993年
『「可憐」命の文学』千葉貢 双文社出版 1991年

授業外での学習

必要に応じて配付したプリント(文章もの)は必ず通読し、意見や感想、質問事項などをメモしておくよう心がけること。また、設問事項や問題文を記載した自家製のプリントには、それぞれ解答を記入、あるいは記述しておくよう心がけること。さらには、スケジュールに掲げた作家や作品について下調べも怠らないように。

評価方法

受講の状況(小テストの結果など30%)、レポートの形式や内容、期末試験の結果(70%)などを総合的に判定し、最終的な評価(評点)を行います。

履修上の注意

教科書の代わりに、必要に応じてプリント(コピー)を配布します。授業には積極的に出席し、よくノートに書き込むよう心がけて下さい。スケジュールに掲げた作品や作家について、少しでも多く理解し、レポートを作成できるように、自分なりに努力することも忘れずに下さい。

科目名 街と建築
Title Town and Architecture
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 石田 寿信(イシダ トシノブ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

建築設計事務所と研究活動の両方を生かした講義を行う。街と建築は、存在している地域固有な地理・歴史・文化的背景のもとで、異なるデザインとして表現されている。これらのデザイン性は、居住者の生活・使用材料・建築構造・環境への考え方・都市機能などの違いによって生まれている。本講義では地域生活者の視点に立って、街と建築のデザインに関する基本的な性質の知識を学ぶ。また、学んだ知識をもとに、身近な生活環境である街と建築についての想像力を養う。

達成目標

街や建築の見方・調べ方について、講義で学んだことを生かして記述することができる。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス：授業計画、演習内容、自己紹介
- 第2回 建築と生活：生活について考えた人たち
- 第3回 建築と計画：食寝分離論から建築計画学へ
- 第4回 建築と生活改善：都市・農村の生活改善について
- 第5回 建築と歴史：玄関の成立について
- 第6回 建築と環境：快適な環境について
- 第7回 演習1：中間発表
- 第8回 演習2：中間発表
- 第9回 建築と構造：建物の安全性について
- 第10回 街の歴史：歴史から学ぶ街の読み方
- 第11回 街と村：歴史的な街並み・集落について
- 第12回 街とコミュニティ：近代都市計画の理念と方法について
- 第13回 街とまちづくり：街の法制度・まちづくりについて
- 第14回 演習3：最終発表・意見交換
- 第15回 演習4：最終発表・意見交換、レポート提出

教科書・参考文献

教科書 なし

参考書 「こんな家に住んできた-17人の越境者たち」(稲泉連著、文藝春秋、2019)、「生活の視点でとく都市計画」(薬袋奈美子,室田昌子,加藤仁美著,彰国社,2016)

授業外での学習

世界ふれあい街歩き、新日本風土記、ファミリーヒストリー(NHK)をなるべく視聴すること。住んでいる街の文化財や伝統行事、生活している住まいのあり方に興味をもつこと。

評価方法

各自において街と建築の体験を語るレポートの作成・発表を行う。
100点満点のうち、レポートの作成・発表70点、小テスト30点とする。

履修上の注意

テレビを視聴し、参考書をよく読んでおくこと。リアクションペーパーを活用する。

科目名 美学
Title Aesthetics
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 峯尾 幸之介(ミネオ コウノスケ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

われわれは○○賞を受賞した映画や美術館に展示されている絵画をありがたいものとして受け取りがちですが、必ずしも万人がそうした作品を良いものだと思うわけではありませんし、良いと思ったとしても、その良さを表現するのはとても難しいことです。そもそもわれわれは美や芸術について客観的に論じることができるのでしょうか。哲学者たちは主観的なものと客観的なものの境界を見定めながら、美的なものにかんする間主観的な(どの主観にも妥当する)認識を追求してきました。そこで本講義では、古代から現代にいたるまでの美学や芸術哲学を概観することによって、美や芸術について考え、論じるための方法を学ぶことを目指します。地域政策という観点においても芸術による地域振興の重要性がみとめられつつあることを考慮して、とりわけ、美的なものやわれわれの生や社会にとってどのような意義をもつのかについて理解を深める機会を提供したいと思います。

達成目標

- ・ 美や芸術について考え、論じるための方法を学ぶ
- ・ 自分自身の感性について、他者にたいしてわかりやすく表現する力を身につける
- ・ 主観的なものと客観的なものの境界を見定め、他者との共通認識にいたる力を身につける

スケジュール

- 第1回 美学とはなにか：感性、美、芸術
- 第2回 古代ギリシャの美の哲学(プラトン、プロティノス)
- 第3回 古代ギリシャの芸術哲学(アリストテレス)
- 第4回 感性的認識の学としてのaesthetica(バウムガルテン)
- 第5回 趣味判断について(カントI)
- 第6回 自然美と芸術美(カントII)
- 第7回 ドイツ観念論の美学(シラー、シェリング、ヘーゲル)
- 第8回 生の哲学者たちの美学(ショーペンハウアー、ニーチェ)
- 第9回 感情移入の美学(Th. リップス)
- 第10回 現象学派の美学(フッサール、初期現象学)
- 第11回 芸術作品の存在論(N. ハルトマン、インガルデン)
- 第12回 芸術作品の解釈学(ハイデガー、ガダマー)
- 第13回 分析美学
- 第14回 現代アートの諸問題
- 第15回 まとめ

教科書・参考文献

教科書 講義中に資料を配布します。

参考書 小田部胤久『西洋美学史』東京大学出版会、2009年。佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、1995年。西村清和『現代アートの哲学』産業図書、1995年。

授業外での学習

配布資料の内容を復習すること。各自の関心におうじて参考書を確認すること。

評価方法

学期末レポート：70% 平常点(コメントシートふくむ)：30%

履修上の注意

とくになし。

科目名 音楽論
Title Music Theory
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 若林 一恵(ワカバヤシ カヅエ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

この授業では、「今よりもっと音楽を好きになる」ことを目指します。音楽は、何も知識をもたずとも本能的に感受することができるものですが、音に対する繊細な感覚を育て、知識を得ることによって、より豊かに楽しむことができるようになります。それをぜひ体験してみたいです。具体的には、音や音楽、時には無音に注意深く耳を傾ける活動、実際に音を出してみる活動、即興演奏や作曲の活動、グループによるアンサンブル活動、全体での鑑賞および演奏活動などを行います。そうしたさまざまな活動を通して音楽に対する興味と理解を深めていきます。現時点での特別な知識や技能は求めません。音楽に触れるのは義務教育以来という学生も大歓迎です。履修する学生の積極的な態度を望みます。

達成目標

- ①「聞こえる」を「聴く」に変え、その質を高める
- ②音楽作品と向き合うための知識と、それを得る方法を習得する
- ③今以上に音楽を愛好する精神を育てる

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 音楽の三要素①リズム
- 第3回 音楽の三要素②メロディ
- 第4回 音楽の三要素③ハーモニー
- 第5回 音楽の三要素まとめ
- 第6回 西洋音楽史における時代区分
- 第7回 クララ・シューマンとロベルト・シューマン、ブラームス
- 第8回 パッヘルベルのカノンと90年代J-POPの関連性
- 第9回 ムソルグスキー 組曲『展覧会の絵』
- 第10回 管弦楽の魔術師、ラヴェル
- 第11回 チャイコフスキー バレエ作品『くるみ割り人形』
- 第12回 ベートーヴェン 交響曲第9番
- 第13回 エリック・サティとその周辺
- 第14回 12音技法について
- 第15回 まとめ

教科書・参考文献

教科書 若林一恵(2018)『未来の音を聴く:「音楽的な耳」を育てるウイレムスの教育』(はるかぜ書房)

参考書 Wiseman & Langstaff (2003) "Making Music" (Storey Publishing)

授業外での学習

少しでも多く、良い音楽を聴く機会を作ってください。

評価方法

学期末試験: 100%

履修上の注意

「聞こえる」ではなく「聴く」姿勢で臨んでください。

科目名 西洋美術史
Title Western Art History
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 藤沢 桜子(フジサワ サクラコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

西洋美術の歴史の概要を学ぶとともに、西洋美術史学の観点から美術作品を鑑賞するヒントを得ることによって、西洋の美術や文化に対する理解を深める。また、社会におけるイメージの機能についても考察する。

達成目標

西洋美術の歴史に関する概説的な知識を身につける。また、美術作品を感性のみで見のではなく、制作時の文化的・社会的背景を考慮するなど、西洋美術史学の観点からも鑑賞できるようになる。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション(本授業の位置づけ、概要、評価方法の説明など)
- 第2回 美術作品の見方の概要(切り離された作品のもとを辿る)
- 第3回 西洋美術の歴史①(古代ギリシア・ローマ)
- 第4回 西洋美術の歴史②(中世)
- 第5回 西洋美術の歴史③(中世～ルネサンス)
- 第6回 西洋美術の歴史④(ルネサンス)
- 第7回 西洋美術の歴史⑤(バロック・ロココ)
- 第8回 西洋美術の歴史⑥(新古典主義～印象主義)
- 第9回 西洋美術の歴史⑦(19世紀末～20世紀)
- 第10回 中間総括(西洋美術の歴史の確認とまとめ)
- 第11回 作品記述(言葉による作品描写)
- 第12回 作品の中の名脇役(細部に潜むメッセージに気づく)
- 第13回 図像学・図像解釈学①(人物特定の鍵を見つける)
- 第14回 図像学・図像解釈学②(作品の主題や内容を考える)
- 第15回 図像学・図像解釈学③(作品制作時の社会的・文化的背景を考慮し、作品のもつ意味を考える)

教科書・参考文献

教科書 高階秀爾監修『増補新装カラー版 西洋美術史』美術出版社、2002年

参考書 青柳正規ほか編『西洋美術館』小学館、1999年(大学図書館蔵書)。そのほかについては、授業で紹介する。

授業外での学習

次回の授業範囲に関連する項目について、教科書などで予習しておくこと。また、授業後は教科書や配付資料、自筆ノートなどで復習するとともに、美術館・博物館ウェブサイトやGoogle Arts and Cultureにて授業で扱った作品を鑑賞したり、関連作品についても調べたりしてみる。

評価方法

毎回のコメントシート：20% 中間総括の確認テスト：40% 学期末試験：40% これらを基準に評価する。

履修上の注意

中間総括の確認テストと学期末試験の未受験者は、評価の対象とならないので注意する。授業時間では、おもにパワーポイントを使用するため室内が暗くなるので、ノートを取りにくい場合は各自工夫をすること。

科目名 東洋美術史
Title Eastern Art History
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 加藤 詩乃(カトウ シノ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 前期
-----------	------------	----------	------------

目的

日本・東洋美術史の流れを各時代の社会的・文化的背景とともに論じる。飛鳥時代～江戸時代の彫刻・絵画・書跡・工芸を中心に、代表的な作例を取り上げながら編年的に解説する。特に、各々の分野や時代において、日本と東アジアの美術の特色を明らかにしながら、わが国において中国・朝鮮半島の文化がどのように受容されてきたのかについて考察していく。そのうえで、東アジア的視野で日本美術史の展開を捉えることを課題とする。

達成目標

- ・ 日本・東洋美術の代表的な作品や基本的な技法について説明できる。
- ・ 美術作品の鑑賞方法を身に付ける。
- ・ 日本・東洋美術史の流れを各時代のさまざまな文化交流の歴史とともに捉えることができる。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション 日本・東洋美術史の分類と鑑賞の方法
- 第2回 法隆寺献納宝物と仏教伝来
- 第3回 飛鳥白鳳時代と中国朝鮮半島の彫刻
- 第4回 日本古代文字と中国朝鮮半島の文字文化
- 第5回 正倉院宝物とシルクロードの文物
- 第6回 鑑真と天平文化
- 第7回 空海と密教美術
- 第8回 仏伝図から絵巻物へ
- 第9回 日本の仏画と宋元、高麗仏画
- 第10回 鎌倉彫刻史と宋風
- 第11回 雪舟と南宋～明代の水墨画
- 第12回 唐物と美濃焼-茶の湯文化-
- 第13回 狩野派と琳派
- 第14回 江戸の文人画
- 第15回 まとめ 東アジアのなかの日本美術史

教科書・参考文献

- 教科書 特になし。
各回にレジユメを配布します。
- 参考書 『増補新装 カラー版 東洋美術史』(美術出版社、2012年)
『日本美術史』(美術出版社、2014年)

授業外での学習

- (事前)各自、次回の授業のテーマに該当する作品を調べる。
(事後)授業の内容を復習し、関連知識を深める。適宜、授業内で紹介した展覧会を見学する。

評価方法

- 授業内小レポート(40%)
期末レポート(60%)

履修上の注意

特になし。

科目名 発達心理学
Title Developmental Psychology
科目区分 一般教養(人文)

担当教員
非常勤講師 小池 庸生(コイケ ノブオ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 1	単位区分 選択	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------------	----------	------------

目的

人間を理解するために、行動や心的機能の発生・発達成熟過程の一般的法則および各発達段階における心身の発達と学習の過程を学ぶと共に、障害者(児)の心身の発達・学習過程についても学ぶ。

達成目標

発達とは何かということから始めて、人の一生についての理解を深めること、さらに自分の将来像を構築するための指標にできることを目標とする。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション、講義概要、スケジュール、評価方法等
- 第2回 I. 発達心理学の基礎 1
- 第3回 I. 発達心理学の基礎 2
- 第4回 II. 身体と運動機能の発達 1
- 第5回 II. 身体と運動機能の発達 2
- 第6回 II. 身体と運動機能の発達 3
- 第7回 III. 知的機能の発達 1
- 第8回 III. 知的機能の発達 2
- 第9回 III. 知的機能の発達 3、IV. 人間性の発達 1
- 第10回 IV. 人間性の発達 2
- 第11回 IV. 人間性の発達 3、V. 社会性の発達 1
- 第12回 V. 社会性の発達 2
- 第13回 V. 社会性の発達 3、VI. 発達と学習 1
- 第14回 VI. 発達と学習 2、VII. 発達の障害と問題 1
- 第15回 VII. 発達の障害と問題 2、まとめ

教科書・参考文献

教科書 使用しない

参考書 適宜、講義内で紹介する

授業外での学習

発達心理学に関係する本を読むこと。
理解を薦めるために、子どもから大人までの行動をよく観察してみること。

評価方法

定期試験が80%、講義内課題等授業に取り組む態度が20%

履修上の注意

そのときどきの状況や必要性に応じて、授業計画を変更して行うことがある。